日本国際経済学会第 72 回全国大会（2013 年 10 月 12-13 日@横浜国立大学）
第 3 分科会　環境・資源・エネルギー

「自然資源貿易論」の再検討：Ecological Unequal Exchange 論の検討を中心に

山川俊和*

要旨

現代世界経済は、自然資源・生態系サービスの存在に支えられている。こうした「古くて新しい」事実が、環境危機と資源制約が深刻化する今日、再び注目を集めている。「環境の国際政治経済学」においても、世界経済と自然資源の問題にどうアプローチするかは、方法論的に重要な課題だといえよう。そうした観点から、本報告は自然資源と貿易の関係性について再検討を試みる。

山川（2012）では、現代的なパースペクティブから、古典派・新古典派貿易論と環境・自然資源の関係性について考察を行った。自然資源（リカードの場合では穀物）の貿易が存在することによって、一国の環境制約にもたらされる影響とは何か。それは、一国の土地の生産性の悪化という生態系自体のサービス水準の劣化を、貿易（外国市場）によってカバーしていると表現できる。そうした自然資源の制約を前提とした古典派の資本蓄積論的な視点は、交換の利益と貿易パターンの解明に傾斜する新古典派貿易論の問題意識からは消えていった。

本報告では、こうした自然資源（制約）と貿易の関係性について、エコロジー経済学的な観点から捉え直す。まず、上記の貿易論をめぐる論点を整理しつつ、日本の（自然）資源貿易論の展開について言及する。次に、自然資源の貿易についての実物面（physical term）での「尺度」の問題と、自然資源の利用と消費をめぐる「環境コストとその負担」の問題について検討する。前者については、Ecological Footprint などが該当し、後者については、いわゆる社会的費用を考慮した場合の国際的分配の構造が該当する。こうした論点を検討するのは、主流派の貿易論・国際経済学が貨幣的な尺度を用いて取引利益に注目するのとは対照的に、グローバリゼーションの実物面と分配問題に注目しているためである。最後に、自然資源貿易と国際的分配の問題を扱い、ある程度まとまった研究が蓄積されつつある「エコロジカル不等価交換論（Ecological Unequal Exchange）」の射程と課題について検討する。具体的には、Anderson and Lindroth(2001)や、Rice(2007)など、世界システム論の問題意識を継承している研究者の議論を取り上げ、彼らが指摘するエコロジカルな「不等価」（「不平等」）な交換の論理を明らかにする。

参考文献

山川俊和（2012）「自然資源経済論からの貿易論・序説」『一橋経済学』5(2):77-9.

Anderson, J. O. and Lindroth, M. (2001) “Ecologically unsustainable trade”, *Ecological Economics*, 37:113-122.

Rice, J. (2007) “Ecological Unequal Exchange: Consumption, Equity, and Unsustainable Structural Relationships within the Global Economy”, *International Journal of Comparative Sociology*, 48: 43-72.

* 下関市立大学経済学部准教授 yamakawa@shimonoseki-cu.ac.jp